

岩手郡医師会

岩手郡 医史

南部藩では領内を三十三通りの行政区域に分け、二十五カ所に代官所を置いた。代官は藩公の代理として君臨し、藩主と代官御給人の俸禄を含めて、ほしきままに年貢を割当、賦課し、農民に対して権力をふるい、警察・税務・役所の権限一切を持って臨んだ。しかし代官所は農民のため、何一つめんどうを見ない。治山・治水も数年の交替制なので農民側に立つ者もない。

貞享三年（一六八六）岩手山が大噴火を起し、灰は花巻地方まで降り、北上川には硫黄が流れた。それから数年、雑魚の一匹もすめなくなり、農民は酸性降灰に対抗する術も知らず、不作凶作が相次いだ。代官は年貢取立ての手をゆるめない。

元禄八年（一六九五）の大飢饉には、藩庫から米穀味噌を放出したが、餓死者は四万人を超え、各所から減免運動が起った。元禄十



現会長 上野精三

四年（一七〇二）、またも

凶作飢饉が襲い、餓死者は二万六千を数え、笹の実で生命をつないだ。

代官所区域を三十三通りに整理した際、沼宮内通りには「御蔵奉行」がおかれ、

藩庫三棟を建てて管理し、農民に君臨し、雫石通りには「代官所」を置き、秋田境の警衛のため若干の藩士を置いたので、この藩士を御給人と呼んでいる。戊辰戦争の際には、橋場口の路に当るので、藩軍は雫石に宿营地を設定して戦った。

南部侯の医者は御城医者と呼ばれ、殆んどが京都江戸から招かれたが、数年で帰郷した。つきつきと江戸南部邸で目をつけた医者を高禄で迎えており、領内の医師を殆んど登用しない。藩侯の妻女は、たいてい上方から迎えていたので、医者も上方の医者でないと奥向の病人には勤まらなかつたのであろうと推察される。藩士と称する特権階級者の医者は「御役医」と呼ばれ、各代官所で、町医の中から御目見得を申しつけて、役医に取り立てている。他の通りの代官所「御役医」の名が残されているが、沼宮内御蔵奉行と雫石代官所の役医の名は僅かしか判っていない。今後の郷土史家の研究に期待をかけている。岩手県史の藩政後期の御給人内訳の一覧表には、

雫石通御給人 五十石以上の者は無く、以下が五人、与力一名、役医一名。

沼宮内通御給人 百石以下一名、五十石以下十三名、与力一名、同心二名、役医二名、とあるが名前はわからない。

陸中史稿には「陸奥岩手郡巻堀村に金勢宮ありて淫祠なり。陽神を祭る。蓋し我皇国此神を祭ること甚だ古し、古語拾遺に『以て虫を抜ふ』と云へり、巻堀祠は南部藩の医員飯富氏に始まりしとも云へり。思うに此神を祭るは、特に我が皇国のみならず西蕃太古伝に盤古真王と云い、印度蔵志に大梵自在天皇というも即ち此神なりと論ぜらる。天保中印行の陰陽石神図に信濃小懸郡根沢村にありて云々」とある。杜陵古事記には「沢田金勢明神は寛永中、苦別地刑

部の建立なり。もと刑部が家従七助の信仰にて建立せらる。其の後刑部絶家す。鰥口には再興願主飯富了通とあり。」と記している。

東山志には「巻堀村の民家に惣七なるものあり。金勢明神を祭り此神いつの頃より祭れるという事を知らず。神体は唐金を以て造れる男根にして、土俗伝えて此村の少女十三、四歳になれば一夜夢中にたわむる事あり。これ金勢神の淫瀆なすが故なりという。中古一靈人この犯罪を悪みて鉄のくさりを以って繋ぎたりと云へども猶その淫瀆を止めず、時々遊行をなすという。」とあり、七助と惣助は同一人か否かはわからない。

再興願主の「飯富了通」とは、寛文五年（一六六五）外科医として、南部侯に取立てられ、十五人扶持、外に合力金若干で召抱えられ、延宝元年には二百石に増された人。父は駿河の人である。了通は筑前で生まれ、長崎で外科医学を修めているので、蘭法外科を学んだ人だろうと云われている。

何しろ不來方城の隣接地なので明治維新になっても、盛岡城下の variability の蔭にかくれて大きな変革が伴わない。

明治五年、盛岡県から岩手県に変わり、沼宮内出張所が閉鎖され、第一区となった岩手郡は、盛岡をも包含しているので、医師数も五十四人と県内最多となり、遠野三十一、花巻二十三と続いている。

明治七年種痘医制度が設けられ、中央から新進医師が来県し、明治十五年には盛岡地方の南岩手郡は、内外科七十名、種痘医二十四名。北岩手郡は内外科七名、種痘医二名と記されている。

明治九年から始まった郡立病院計画も、盛岡圏として北岩手郡は無視され、勉強するものは盛岡へ出て出世している。

明治十二年、北閉伊郡岩泉村に公立病院設立の計画があり、伺書

にある山崎忠治は下厨川の人であった。医員履歴書には次の通りある。

岩手県平民陸中国岩手郡下厨川村居住

山崎 忠治

慶応元年一月ヨリ同三年十二月迄三年間、陸中国東中野村上野祐郎ニ従ヒ、漢法医学修業、明治二年一月ヨリ同五年二月迄三年二カ月間、陸中国東中野村坂本春江ニ従ヒ洋方医学内外科修業。明治十年十二月ヨリ同十二年四月迄岩手医学学校へ入学、洋法医学内外科修業。明治十二年四月ヨリ同年六月迄陸中国岩手医学学校附属岩手病院へ勤仕。明治六年一月ヨリ同九年八月迄、陸中国南岩手郡雫石村ニ於テ、洋法医術内外科開業。

とあり、明治十二年十月十五日県令島惟精代理 岩手県大書記官岡部綱紀より内務卿伊藤博文へ提出、十月二十九日認可されている文書である。（岩手県史第十巻）

この北閉伊郡病院は地方税支弁なので財政が伴わず、明治十九年までに廃止された。

明治十五年の県統計書によれば、

南岩手郡（盛岡市及び周辺の岩手郡）内外科七十名、種痘医二十四名

北岩手郡（現在の岩手町・西根町・松尾村）内外科七名、種痘医二名

とあり、南岩手郡は盛岡があるので多いが、北岩手郡即ち現在の岩手郡には非常に少ないことがわかる。気仙六十一名、痘医四名、東磐六十五、痘医六、西磐五十二、痘医六、江刺四十一、痘医七と、気仙・江刺・東和賀四十九など、北上山系町村に多いことがわか

る。

明治二十二年に市町村制が公布されて、盛岡市・沼宮内町・一方井村・御堂村・川口村等が編成されたが、明治二十四年、東北本線が盛岡から青森まで通り、好摩・沼宮内・奥中山の各駅が開業すると、気仙・江刺・東和賀の医師が減り、反対に、人口増加、産業振興に活気づく東北本線筋に医師が多く集まるようになった。

明治三十二年の名譽録によれば、各郡とも開業医家数は減少している。今までのように医者之家に奉公して、見よう見まねで勝手に医者であると看板が出せなくなったのが、明治八年であるから、それ以後は開業試験に合格しないと、医者と認められない時代になった。

試験合格者は皆老齢になって歿して行くが、新制医学校を卒業して受験するものの数が少ないので、県下で明治十五年五百四十二名より三十二年には四百十七名と減り、東磐四十七、盛岡と西磐が三十九、胆沢・気仙が三十八、和賀三十七の順で、岩手郡は十七名とになっている。当時は岩手県岩手郡盛岡市と記載するのが正しかったようである。

明治三十五年沼宮内町、御堂村に大火発生、汽車の飛火によるとか、役場・警察まで類焼。全焼が二百八十五戸と記され、開業医家も類焼したものと思われる。三十七年にも沼宮内大火二百六十戸全焼。四十二年にも大火百四十八戸が全焼とある。

明治十七年から各郡では郡開業医師組合を設置して、集会・勉強会・講演会等を行ったが、その後郡医会を経て、明治三十九年医師会法が公布された。設立總會をもち、認可されたのは岩手郡医師会告示第二百号に、明治四十年四月十六日となっている。岩手日報の

所載（菅原竜郎調査）によれば、明治四十年二月七日号に、厨川村新田町の男（四十二歳）天然痘と確定。同村隔離病舎は兵營建築のため、取り払われているので、同家から百間離れた同家の厩を仮病院として隔離、同家は嚴重に消毒、伝染経路不明なりとある。

二月七日 下厨川船越金五郎氏医師免許証下付さる、と報道されている。

四月二十九日 岩手郡医師会總會、郡役所にて開催せり。
明治四十二年三月二十七日 午後一時より郡役所楼上にて臨時總會開催。

同年八月二日より四日まで、岩手郡医師会の主催により郡役所楼上にてトラホーム講習会開催。講習員は郡内各学校長、町村衛生主任、書記等二十五名。講師は平館村医山本茂三氏なりとある。

明治四十三年十月十日 菊池医院移転新築披露。沼宮内菊池医院は昨年火災にあい、旧警察署跡に敷地交換、移転新築披露す。来賓は加藤小林区署長・入間田沼宮内駅長・今野分署長・柴田・柵山他の地方有志多数列席す。

明治四十五年 改元 大正時代となり、科学振興時代を迎え、第一次世界大戦が始り、日本は青島に出兵した。

大正三年の郡医師会總會

四月二十八日午前十時郡役所楼上（注）郡役所は盛岡市にあつた）
予算決算諮問事項につき協議決議す。

諮問一 トラホーム予防撲滅上最も良好なる方法如何。

理由 トラホーム予防並に撲滅に付ては県が命令並規程を設け爾

来防退に努むると雖も、容易に其効果を収むる能わす。殊に徴兵検査の結果による該病患者歩合は、最近三ヶ年の成績は別表の如くにして幾分減退の傾向を示すと雖も、百中四十の率を降らずして、今尚県下は勿論全国に於て最劣等の地位にあり。

昨大正二年度の徴兵検査の成績に依れば、甲種合格一名をも出さざる町村二あり、是等は他の原因にも依るべきも、トラホーム亦一因たり。小学校児童に付ては、各位の努力に俟つの外、常に学校職員に於ても予防撲滅に努め大に見るべきものありと雖も未だ減退せず、其の他に付ても未だ成績良好ならず、是れ各位に意見を諮う所により。

諮問二 肺結核予防救治上最善の方法如何。

理由 肺結核の逐年蔓延して多数の生命を損するもの少なからず。先に内務省が該病予防に関する命令を発し、本県亦予防規定を設け、爾来防退に努むと雖も其効果遅々たるが如し。更に本年三月、予防救治に関する知事の訓令を発せらる。是れが実行方法等に関する各位の意見を諮う所により。

諮問三 肺結核予防上該患者速知の方法として、医師に於て該症診断の場合、直に町村長に通知するを可なりと認む如何。(以下略)

大正六年二月十八日 千葉雄司氏沼宮内に開業。東京慈恵医卒。駒込病院に勤務後、岩手病院に勤務、今回沼宮内町猪狩医院の跡に開業せり。(岩手日報より)

大正八年 医師会法の第三次改正が公布され、初めて公務上の法人格を得た。従来は、開業医だけの任意団体であったが、この時の改正で、郡内に居住する医師は全員加入することになり、医師会総

会の議決に服することになった。勝手に実費診療所の看板は出されなくなった。これは医師会の度重なる建議要請にもつき、内務省が改正に踏み切ったのである。岩手郡医師会の設立認可は、告示第四百四十六号を以て大正九年三月三十日であった。

大正十二年四月五日 岩手日報所載

沼宮内町当局は多額の手算を計上し、従来済生会に委せればなしの細民医療は、誠に心もとなしとて県下に先がけ、実費診療所を設置することにした。郡民はその日の糧を得るために、へとへとに疲れ、栄養失調、伝染病に絶えず犯さるる日常でその姿は誠にあわれなり。

大正十二年の郡医師会総会

同年四月十五日 郡医師会総会は十五日午後一時から同会事務所で開催、次の事項を審議した。

郡長諮問案

一 乳児死亡率低減に関する意見如何

二 医師法改正に関する意見如何

郡医師会より当局に対する建議案

一 岩手県学校衛生主事設置を県当局に建議するの件

二 岩手郡学校医会設立を郡当局に建議するの件

協議事項

一 本郡医師会に於いて、社会事業として其の部数を定め実費的治療券を発行し、本郡各町村に適當なる方法を以て窮貧生活者を発見、之の交付をなし、右券所持者には各員一般に実費的診療せんとするの件。

二 急性慢性伝染病等の通俗的予防方法の宣伝方法に関する件。

三 医師会閉会後に医学会を開催方等々。

大正十二年九月一日 関東大震災起る。

大正十四年五月二十四日 岩手郡医師会長瀬川彦太郎氏退職昭和二年八月十日死亡（長男元陸軍軍医少尉宏氏昭和十九年南方ニテ戦死）。副会長菊池鯉之助会長代行。

郡の行政区域の変遷

この頃の岩手郡は一町二十四カ村であった。

沼宮内町 厨川村 米内村 浅岸村 築川村 中野村 本宮村
 太田村 御所村 滝沢村 玉山村 藪川村 御明神村 西山村 雫石村 川口村 巻堀村 波民村 大更村 田頭村 松尾村 平館村 寺田村 一方井村 御堂村。

昭和三年に米内村、昭和十五年に厨川村、昭和十六年に中野村、浅岸村、本宮村が盛岡市に編入。昭和三十年の町村合併法で築川、太田の二カ村、及び雫石、玉山、滝沢の各町村の一部が盛岡市に編入され岩手町（沼宮内町、川口村、御堂村、一方井村）雫石町（雫石町、西山村、御明神村、御所村）西根町（平館村、大更村、田頭村、寺田村）玉山村（玉山村、巻堀村、波民村）の新町村が誕生し従来の滝沢村、松尾村と三町三ヶ村の新しい岩手郡が形成された。

この間、九戸郡の葛巻、江刈、二戸郡の田部の各町村が岩手郡に編入され、また医師会としては二戸郡安代町が加入となった。所謂盛岡市を包んでいたが、次第に中味が大きくなって今日になっている。

なお明治時代に衛生関係条例を制定した村があったので、摘記す

れば、明治十六年以来、県衛生協議会や、郡協議会等が招集されたが間もなく廃止。明治二十四年三月三十一日付で衛生組合準則を公布し、各市町村に衛生組合を作らせている。二十八年五月から市町村清潔法が制定公布。現在に至っている。

この他、西山村では村医制度を、沼宮内村及び雫石村では実費診療所補助規定を、沼宮内村で更に汚物掃除規定、汚物監視員設置規定等を制定して衛生活動を行った。

郡内で発生した大事故（二項別記あり）

大正四年五月二十九日 盛岡中学校三年生の日帰り遠足で八戸に行き、その帰途、滝沢駅付近で列車が脱線転覆した。死亡一名、重傷三名、軽傷十四名が発生し、近隣医師が駆けつけ、応急処置をして岩手病院に担送した。

昭和十四年の松尾鉱山落盤事故も大いに世間を驚かせた。支那事変の最中であり、落盤そのものの犠牲より、硫化物中毒で無傷のまま死亡するものが相次ぎ、若干名の故人は、今なお廃山の山底に永遠の眠りについている。

この時、鉱山病院関係者は救護に全力をあげ、近隣の医師、岩手医専の救護班の絶大の活躍があり、軍も毒ガス研究の立場から現地状況、死亡に至る状況、病理的所見等の詳細なる報告を求めた。戦後昭和二十七年にも発生し、鉱山病院医員の労苦が偲ばれた。

また郡内各町村民は衛生思想に乏しく、流水を水源として常飲しているのが、毎年赤痢、腸チフスが発生。戦後の抗生物質の普及によってはじめ終熄した。

明治大正昭和初期の医師名

記録がないのではっきりしないが、古老の言によれば、左記の方々が郡内で医療に従事された。広い地域を主として徒歩で、また乗馬、一部の方は人力車で往診せられ、大正の後半頃から当時として破格の文明の利器たる自転車で行診された。今日われわれが考えるとその御勞苦の程が偲ばれる。

山崎忠治 下厨川村、明治十二年、北閉伊郡立岩泉病院医員となる。

山本茂三 平館村村医。明治四十二年三月二十七日トラホーム講習会講師となる。

菊池鯉之助 沼宮内町、菊池医院。万延元年七月十七日生。東亜医学校卒。明治十九年試験合格。二十一年盛岡市に開業。三十年紙町に盛岡病院を創立し、経営三年、他に渡して三十三年沼宮内に開業。昭和初期の医師会長。鉄道嘱託医、町医、村医。

菊池道三 鯉之助子息。明治二十六年三月六日生。大正十一年日本医専卒。西比利亞滿洲等に遊学後帰郷。父の菊池医院をつぎ、郡医師会理事。在郷軍人分会長。戦後歿。

菊池道二 西根町、菊池道三氏の甥。戦後歿。

八角胖 巻堀村好摩、内科眼科八角医院。明治二十二年十月八日生。岩手県出身。大正四年試験合格、東京市神田区錦町山口眼科医院に四年勤務。大正八年好摩に開業。昭和三年郡医師会副会長。巻堀尋高外二校の校医。同村医、現玉山村好摩の八角正司氏の実父。英国型のセントルマンで、煙草は「桃山」だけでダンヒルパイプは現在令息正司氏所持とのこと、紛失しないよう大切に保存せられたし。

猪狩見龍 沼宮内町 内兒科猪狩医院。明治十五年十月三十一日生。明治四十年仙台医専卒。大正二年米町開業。現盛岡市中央通り猪狩統一氏の実父。

岩泉周甫 平館村岩泉医院。慶応元年二月二十六日生。元南部八戸藩士にして祖父源右衛門が志和代官として在勤中に生れ、維新の改革に廃藩置県となり、祖父以来任地に居住した。明治十七年県立甲種岩手医学校に入学したが、十九年廃校となり、しばらく郷里にあって、父岩泉貞安の医業を手伝った。後に某製薬会社に勤務の傍ら、済生学舎に通学した。明治三十二年四月東京に於ける医術開業試験に合格し実地研究中の処、父貞安歿し、急ぎ帰郷医業を継ぐ。昭和二年四月、盛岡病院平館出張所主任として平館に移り、開業した。趣味は多方面にわたり、特に俳諧を日詰の木村半水翁に学び、のちに正岡子規の教えを受け号を子鳳と称し、十数年俳壇の添削をなし、著書に「俳句集」「野菊」「子鳳集」等あり。

田口弟治 平館村、外科田口医院。明治二十二年八月七日生。東北大医専大正六年卒、岩手病院に勤務。大正九年秋田仙北郡生保内村に開業後、来村開業した。

遠藤治郎 西山村長山、大正昭和初期まで開業。

安本仁蔵 雫石村 明治三年三月十六日生。明治三十一年試験合格。内科一般安本医院、岩手県出身。済生学舎卒。以来来村開業、村医、校医。趣味書画狩猟。

謝向栄 田頭村、内科謝向医院。光緒五年一月二日生。支那浙江省出身。大正五年東北大医専部卒。東京順天堂医院。江東病院等にて研究。大正九年来村開業、村医、校医。

和泉源三 平館村、内兒科和泉医院。明治二十二年六月二十六日

生。岩手県出身。大正三年東北大医専部卒。盛岡病院に勤務。一年後、一年志願兵として入營。大正六年北海道根室町加瀬病院勤務。のち下閉伊郡岩泉町に開業。慶応病院内科入局研究。大正十三年仙北組町に本院開業。平館に分院を開業したもの。

小原有造 沼宮内内科菊池医院に勤務。岩手県出身。大正六年慈恵会医専卒。盛岡病院内科担任。のち紫波郡志和村志和医院院長に就任。昭和九年菊池医院長として赴任した。

佐々木浩吉 沼宮内町、佐々木医院。明治三十七年十月十三日生。岩手県出身。昭和五年三月東京医専卒。岩手病院眼科・外科に勤務。昭和八年三月来町開業。沼宮内尋高小、沼宮内家政女学校嘱託校医。一方井村村医。趣味スポーツ、旅行。昭和五十四年没。

田口博 雫石村、内科雫石他三カ村共立病院院長。明治三十年七月二日生。秋田県出身。昭和三年三月東京医専卒。母校の内科に入局。昭和四年十月院長として来村就任。昭和九年郡医師会理事、趣味花卉盆栽。新制二代会長。

菊池道治 平館村、内兒科菊池医院。明治三十一年六月二十九日生。岩手県出身。昭和五年東京医専卒。日本橋区矢ノ倉町加藤病院に勤務。六年四月本所区吾妻橋前田医院にて内科小児科担任。八年七月来村開業。平館、松尾、寺田、大更等四校校医。趣味はスポーツ。

平吹平三郎 雫石町、内外齒科平吹医院。明治十一年十一月七日生。山形県出身。明治三十六年四月、済生学舎卒。三十七年陸軍軍医。日露戦役に従軍。正八位勲六等陸軍三等軍医任官。除隊後、北海道空知郡砂川町に開業。大正十五年帰郷、山形市に開業。昭和七年八月来村開業。趣味囲碁。

岡部先生(名失念) 沼宮内 大正期
林崎先生(名失念) 沼宮内 昭和初期
船越金五郎(別掲:人物編参照)

高橋友庵 雫石町、明治中期から明治末期まで、長男友太郎氏も医師となり軍医官として日露戦役に従軍。後、父子ともに東京へ転居した。

栗崎民弥 雫石町、明治末から大正期。

安本又四郎 雫石町、前出安本仁蔵氏長男。父仁蔵氏は九十余歳で逝去。

三田四郎 雫石町、三田医院。明治十二年八月二十日生。明治三十八年仙台医専卒。岩手病院、札幌病院勤務。大正二年来町開業。同八年石鳥谷町に転居開業。

青木今朝夫 雫石町、大正・昭和初期東京に移住。

山田吉規 雫石町、昭和十九年開業、二十年、東京転出。

後藤先生(名不詳) 御明神村、明治末期転出。

坂本正喜 御明神村、坂本医院。明治十五年三月十日生。明治四十二年試験合格。順天堂医院・天祐堂病院・日赤病院に研究。四十三年来村開業。志和村上平沢に転出開業。

小野寺修二 御明神村、明治三十三年八月十八日生。大正十三年熊本医専卒。岩手病院内科勤務。昭和二年来村開業。昭和三年九月小野寺内科の叔父直助教授のもとで研究。学位受領。昭和八年七月満洲国吉林省新站満鉄病院院長。のち国立下ノ関病院長に着任。名誉院長となり来盛。前沢町の実兄小野寺純一博士逝去後の小野寺医院に出向、第七代を継承。先祖小野寺柳真は華岡青州の門人(別項記載)。現在日赤血液センターに在職。

長沢長太郎 西山村、明治二十年から二十八年まで開業。病歿。享年四十二歳。

遠藤治郎 西山村、試験四〇一四九号。大正時代長山に短期間開業。

飯塚藤吾 西山村、終戦直前疎開開業。終戦直後引揚げ転出。

山本茂寿 西根町、明治中期の人。

円子 寿 平館村、明治十二年生。明治三十五年試験合格。岩手病院勤務。のち大正時代に短期開業。昭和二年盛岡病院内科に奉職す。

岩泉周二 平館村、大正時代短期開業。

新渡戸先生(名不詳) 松尾村 明治時代短期開業。

村井藤一 松尾村 大正時代短期開業。

西田安正 松尾村 明治二十七年十二月十三日生れ。鹿児島県出身。大正六年、千葉医専卒、昭和二年松尾鉾山病院に勤務。昭和十二年松尾村に開業。昭和四十六年一月二十二日、盛岡市民病院で没。七十七歳。

鹿岡順平 松尾村 鉾山病院医局。

菱木重嗣(千葉医専卒、元陸軍軍医大佐) 昭和十九年より昭和二十四年迄松尾鉾山病院長、後静岡岡県転出)

塚谷顕邦 沼宮内町、塚谷医院。大正五年五月二十日生、昭和十七年東北大医専卒。

近藤明達 葛巻村、近藤医院、明治二十六年二月一日生。大正五年東北大医専部卒。母校外科教室にて研究。のち旭川衛戍病院に入隊、大正八年五月除隊。七月山形県西村山郡に開業。同十一年葛巻に来村開業。現会員近藤純^三氏尊父。昭和四十一年歿。

遠藤俊次 葛巻村、内外科遠藤医院。明治二十六年七月二十三日生。大正六年東北大医専部卒。盛岡病院内科担任。大正十三年来村開業。昭和三十五年廃業、昭和五十二年没。現会員西島康之氏の伯父。父は遠藤斉助氏。

遠藤初斉 (別掲…人物誌)

小川源達 花巻出身、天保元年(一八三〇)生。明治十四年から葛巻で医業を行う。

遠藤斉助 遠藤初斉の孫。嘉永三年(一八五〇)生。祖父の跡を継ぐ。

岡部安孝 葛巻村 明治四年頃の医人。

平賀先生(名不詳) 葛巻村、明治四十年から大正五年まで外科開業。

藤^三静一 葛巻村、明治四十年から大正九年まで。以後侍浜に移る。

新渡辺剛一郎 葛巻村、大正中期、十年盛岡に移る。

沢木精一郎 葛巻に大正七年から数年開業。

向井田己之助 大正末期葛巻に開業。

村井先生(名不詳) 大正十年短期間開業。

川原文作 葛巻村、明治二十九年五月二十九日生。大正八年新潟医専卒。福岡町矢野医院勤務。大正十一年五月葛巻村立病院勤務。大正十二年三月野田村に開業。

遠藤二郎 葛巻村、昭和初期短期間。

山田シゲル 葛巻村、昭和八年短期間。

池谷運平 葛巻村、昭和九年から四年間。江刈・小平沢・小苗代診療所勤務。

村上甫 昭和十六年江刈診療所短期勤務。

佐藤尚輔 西根町大更、内児佐藤医院。明治四十年九月二十六日生。昭和十九年岩手医専卒。県立大更診療所長。昭和三十一年退任開業。昭和四十七年没。

木村謹三 安代町、昭和十三年から二、三年間開業。のち県保険課技官となる。

佐藤宏 雫石町、西山診療所。大正十二年四月五日生、昭和二十年岩手医専卒。昭和四十年没。

旧制医師会時代の状況

旧制医師会時代の記録は少なく、古い時代の会員中現在なお、地域で活躍中の玉山村の小野寺素行、岩手町の佐々木浩吉両先生の言によれば大要は次の様であった。

医師会事務所は盛岡の仁王小路岩手県医師会事務所に置いて、会員数は初め五、六名しかなかった。総会も役員会も、会長宅の茶の間のコタツで行い、会員二名欠席すれば会議が成立しないので、各自堅く打ち合せの上出席して、流会しないようにしたものだとのこと。

昭和三年の会長は菊池鯉之助氏、副会長は八角胖氏。理事は猪狩見竜、菊池道三氏であった。

昭和八年三月三日の三陸大津波には、会員中最年少の沼宮内佐々木浩吉氏が選ばれ、新進気鋭を買われて救護班長として出勤、のちに岩手県知事から感謝状をうけた。

昭和七年頃から、会長船越金五郎・副会長八角胖・理事田口博氏等の名が残っている。

この明治、大正、昭和の移り変りを沼宮内の歴史から見れば、次のようである。

大正四年 盛岡電気会社が川口村、沼宮内町、御堂村に初めて送電した。

大正十三年 町立沼宮内実科高女開校。昭和二年まで。

昭和十四年 沼宮内より葛巻へ国鉄バス開通。

昭和十九年 町から平館までバス開通。

昭和二十年 終戦。

昭和二十二年 新制医師会発足。六三制実施。

昭和二十九年 県立沼宮内病院開設。

昭和三十年 岩手町誕生。沼宮内、一方井、御堂、川口の一町三カ村合併。

新制医師会時代

イ、敗戦のショックも、ややおさまりかけた昭和二十三年十月当時沼宮内町で開業中の小野寺素行先生が音頭をとり、郡内在住の開業医、勤務医の各位に呼びかけ岩手郡医師会を結成した。

当時開業医は沼宮内町三名、雫石町一名、巻堀村一名、葛巻町二名、平館村二名、大更村一名の十名の外、当時東洋一の硫黄鉱山として繁栄中の松尾鉱山病院に医師約十名、また郡内各町村には三井報恩会関係、県立関係、農業団体関係の診療所が約十五カ所あって医師一名ずつ十五名にて会員数約三十五名である。

口、会議に参集するものは、年配の四、五名は戦前からの「セビロ」服で、若い会員は学生服から直ちに軍服を着用したためと当時の衣料事情のため「セビロ」を作れないで皆階級章なき旧軍服、復

員服を着用した血気漲る青年で、総会は捕虜收容所の円卓會議の觀を呈した。

ハ、結成当時約三十五名程だった会員も、国民健康保険制度の發達で各町村に国保直営診療所が設置せられ、また松尾鉦山の繁栄でその経営の病院も医師陣が充実、逐次会員数が増加し、一時期約五十名となった。

ニ、各町村直営診療所の勤務医は、期限付きで医大各科から派遣せられたもの多く、地域に定着するものが少なかった。

ホ、昭和三十年代後半になると各町村経営の診療所は膨大なる赤字のため閉鎖或は委託経営となり、しだいに会員の定着をみたのは誠に喜ばしいことであった。

ヘ、昭和四十年代初期、石油製鍊による硫黄の過剰に伴い、長年に亘り東洋一の硫黄鉦山として繁栄した松尾鉦山も、逐次縮小より最後は閉山となり、多数の会員を失う状態になった。

ト、このような経過をたどって今日に至ったが今なお管内公的医療機関には医師の定着をみない。何が原因か、県都盛岡市の周辺のためか、また医師の定着を妨げる地域住人の何かがあるものか後世の判断にゆだねたい。

新制医師会時代の主な事故

イ、昭和三十年代になり全国的傾向として各県市町村とも観光開発を進めたため岩手山、八幡平とその資源に恵まれた岩手郡は夏、冬と山岳愛好者、大学ワンダーフォーゲル等の来山多数となり、山中で発生した患者の救護のため、関係町村在住の医師は多大なる苦勞と迷惑を背負わされた。

ロ、西根町の炭疽病

昭和四十年八月十三日西根町一帯に発生し、患者数三六〇名に達した。

会員土谷邦彦氏は原因の究明と治療に多大な貢献をなし、一名の死者も出さずに全員治癒するを得た。

当時国内のあらゆる新聞で土谷氏の功績が認められ、また米国の「スターズ・アンド・ストライツ」社の招待を受けた。

ハ、全日空機事故

昭和四十六年七月三十日午後二時過ぎ郡内雫石町上空に於て自衛隊訓練機と全日空機の衝突事故発生し、一瞬にして全日空機乗客乗務員一六二名死亡し、自衛隊訓練生は落下傘無事降下という当時の航空機事故としては世界最大の事故発生。

当郡医師会は県医師会、盛岡市医師会と共に出勤し、遺体の收容作業、遺族の救護ならびに出勤者の患者の救護等に従事した。

新制医師会になってからの表彰

全日空機事故に出勤した岩手郡医師会は、県医師会、盛岡市医師会、雫石町医師団とともに左記機関より表彰された。

県知事 県警本部長 自衛隊航空幕僚長 全日空 富士吉田市長 雫石町長

新制醫師會結成以來の役員

初代 (自昭和二十二年十月至昭和三十三年三月)

會長 小野寺素行 副會長 上野精三

理事 塚谷頭邦 宇土沢喜一

監事 佐藤尚輔 遠藤俊次

県医代議員 佐々木浩吉

二代 (自昭和三十三年四月至昭和四十三年三月)

會長 田口博 副會長 佐藤尚輔

理事 塚谷頭邦 森尚輔

監事 平野修一 土井尻正次

県医代議員 小野寺素行

県医理事 上野精三

医師 國保代議員 宮杜亨

裁定委員 近藤純造

三代 (自昭和四十三年四月至昭和四十八年三月)

會長 佐藤尚輔 副會長 森茂尚

理事 宮杜亨 八角正司

監事 秋浜晃 土井尻正次

県医代議員 和田栄吉

県医理事 上野精三

医師 國保代議員 土井尻正次

裁定委員 近藤純造

昭和四十七年九月佐藤會



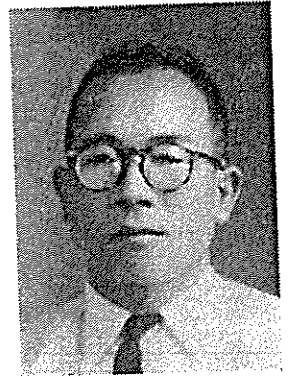
3代 佐藤 尚輔



2代 田口 博



初代 小野寺素行



4代 森 茂尚

長病氣入院、副會長 森茂尚 會長代行。

四代 (自昭和四十八年三月至昭和五十年三月)

會長 森茂尚 副會長 宮杜亨

理事 八角正司 秋浜晃

長谷川貫一 監事 熊谷文五郎

谷文五郎 久慈有一 県医代議員 土谷邦彦 県医理事 上野精三

医師 國保代議員 土井尻正次 裁定委員 近藤純造 医事紛争対策委員 上野精三

昭和五十年四月會長 森茂尚病氣のため辭任。

五代 (自昭和五十五年五月至現在)

會長 上野精三 副會長 宮杜亨 土谷邦彦

理事 近藤純造 坂井博毅 玉山長悦 秋浜晃 長谷川貫一

監事 八角正司 熊谷文五郎